

地元産の新鮮で低農薬の 野菜を食卓へ



秋庭 勇司 さん
(大字大山・50歳)

古河市内の若い農業経営者がグループをつくり、大山で産直の店を開設していると聞き、農業生産法人「ベジタ」代表の秋庭勇司さんを訪問しました。店内には古河市や市周辺でとれた米や季節の野菜、豆類、そば粉、果実（梨・桃など）が販売されていました。

法人設立の目的について尋ねたところ「この農業生産法人は平成8年に農業経営者5名を中心に設立した組織であり、それぞれが知恵を出し合い、良質で安全な農産物を生産するとともに、販売店をつくり、消費者に地元農家から直接農産物を提供することを進めています。農業後継者が減少しているために全国各地で農地も減少しています。農地を守り、自然と人間が共存し、地元でとれたものを地元で消費する『地産地消』が目的です。店の経営はいろいろ苦労があります。大型スーパーに行けば一度にすべてのものがそろってしまいます。スーパーには合

ぶんがくかん発
Vol.74

叔父・永井三郎の遺産 - 永井路子成長記録 -

「東西の小説や思想の本を買い整えておくのは（中略）坊やのために、坊やの聡明さのために希望を以って買い整えて待っている気持ちなのだ」（歴史的仮名遣い等一部訂正）

写真をご覧ください。これは冒頭の文章に出てくる「坊や」の手形・足形です。写し取られたのは昭和3年7月16日。いったい誰のものでしょうか…。何をかくそう、古河市名誉市民・歴史小説家・永井路子、3歳の時の手形と足形です。

記録者は叔父であり、元古河町長でもあった永井三郎。三郎はこのノートの中で、幼少時の永井路子の赤裸々な日々の姿を克明に記しています。と同時に永井路子の将来への期待、希望が愛情豊かな言葉でつづられています。冒頭に引用した文章にも、その一端をかいま見ることができましょう。

永井三郎は明治26年（1893）、永井家の三男として古河に生まれました。軍人を志しますが、肺結核のため大尉を最後に退役を余儀なくされます。そして古河に帰郷し療養生活に入りましたが、時代の要請であったのでしょうか。その後、古河町

助役、次いで町長に就任します。就任当初は「軍人町長」などと呼ばれたりもしましたが、三郎が手がけた町政は、町村合併、国民健康保険制度の導入など、いずれも実現には至りませんでした。このあたりのことは、三郎が自ら『文藝春秋』に連載していた「町長日記」に詳しく出ています。

ところで三郎の療養中の慰めは読書でしたが、それは文学・哲学・経済とかなりの広範囲に及び、また、「石榴亭」のペンネームでもって自身も詩句をたしなみ、古河の文芸サークルの中心的役割を担います。

当時、永井三郎宅はさながら古河の文学サロンの観を呈していました。

そしてまた、三郎は成長記録に記しています。

「おじちやまの考えとしては坊やにその才能と素質とが認めらるる限り藝術界か或は思想界へ坊やの人生を導き度い」と。

歴史小説家・永井路子の誕生には、叔父三郎の思いが色濃く反映されているといえましょう。

（特別展「永井路子展」は11/24まで開催）



永井三郎が記した成長記録